

日本人大学生の意見文における「譲歩」の論理性

伊集院郁子・工藤嘉名子

【キーワード】 意見文、「譲歩」、言語形式、論理性、日本人大学生

1. はじめに

アカデミック・ライティングでは、自説にとって好都合な情報を列挙するだけでなく、自説に対する意見や不利な情報、例外も検討したうえで反論を展開し、自説の正当性を強化していくような論証過程が必要とされる。しかし、不利な情報には言及しない「マイサイド・バイアス (myside bias)」と呼ばれる傾向が心理学関連の先行研究でしばしば指摘されている (富田 2009、山口・三宮 2013、Wolfe and Britt 2008)。マイサイド・バイアスは認知能力 (intelligence, cognitive ability) とはほぼ無関係に見られるため、論理的に考えるスキルを獲得していく必要がある (Stanovich, West and Toplak 2013, Toplak and Stanovich 2003)。

東京外国語大学留学生日本語教育センター (2013)「全学日本語 Can-do リスト : 文章表現 (試行版)」の「意見表明」に関する項目を見ると、400 レベル (中級) は「事実と意見を明確に分けた上で意見を示すことができる」、500 レベル (中上級) は「客観的な根拠に基づいて意見を示すことができる」であり、600 レベル (上級) で初めて、「ある立場や見解について、複数の観点から多面的に検討したうえで、相手の主張を部分的に認めたり反駁したりしながら自分の意見を示すことができる (下線は筆者)」という「譲歩」に関連する記述が見られる。また、CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) の「レポートやエッセイ」に着目してみると、B1 レベルには「自分の専門範囲の日常的もしくは非日常的な事柄について、事実の情報を蓄積したうえで、総括し、報告できる。また、それに対し、ある程度の自信を持って自分の意見を提示することができる」とあり、B2 レベルには「エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる (下線は筆者)」という記述がある¹ (吉島・

¹ B1、B2 は、それぞれ Threshold、Vantage と呼ばれるレベルである。B2 は、A (Basic User)、B (Independent User)、C (Proficient User) の 3 段階のうちの B 段階における高い方のレベルに当たるため、およそ上級レベルに近い方の中級レベルと考えられる。

大橋 2004:66)。これらの2つの評価指標から、大まかなレベルとして中級から上級レベルに上がろうとする際に、下線で示したような「譲歩」を組み込む力が必要とされていることが分かる。

本稿では、上級へのレベルアップを目指す日本語学習者(以下、学習者)に「譲歩」を組み込んだ意見文を執筆指導する際の参照とするため、日本語母語話者(以下、母語話者)の意見文にどのような「譲歩」が見られるか、その言語形式と機能に着目してパターンを抽出し、母語話者による「譲歩」の論理性を探る。

2. 先行研究

論証に「譲歩」を組み込む必要性は、教育現場において常に指摘されているものの、母語話者の「譲歩」の実態に関する実証的な分析はなされていない。伊集院(2010)は、「確かに」という言語表現を手がかりに、日本人大学生の意見文に見られる譲歩構造(「譲歩」+「反論」)の機能と出現位置を分析したものである。本稿は、伊集院(2010)の発展的研究に当たるが、「確かに」という言語表現を「譲歩」の指標として抽出するのではなく、意見文の論証の流れを解釈していく過程で「譲歩」を抽出し、その言語形式と機能の分類を試みることにより、母語話者による「譲歩」の論理性を明らかにすることを目指す。

学習者の意見文に見られる「譲歩」については、伊集院・横田(2010)で中級レベルの学習者の意見文を分析し、起承転結の「転」に当たる個所で「譲歩」して別の立場からの解釈も試みようとしたものの、最終的には強引に自説を繰り返して結論付けるだけの余計な「譲歩」が見られることを指摘した。また、工藤・伊集院(2013a)では、超上級レベルの学習者の意見文を対象に「譲歩」の機能と出現位置を特定し、意見文の各部(序論・本論・結論)に相応しい「譲歩」の論理展開パターンを提案した。さらに、工藤・伊集院(2013b)では、工藤・伊集院(2013a)の知見を教室活動に生かすための方法として、効果的な「譲歩」とそうでない「譲歩」の典型例を対で提示し、比較を通して両者の質的な違いを理解させる教室活動を提案している。

本研究は、これらの先行研究からの発展研究という位置付けで、日本語母語話者による意見文に出現する「譲歩」の言語形式と機能を分析し、母語話者による「譲歩」の実態を記述する。「譲歩」の全体像を把握するため、工藤・伊集院(2013a)と同様に「譲歩」を広義に捉え、「筆者が文章中で、自説と対立する立場に理解を示したり対立する立場に有利な情報を提示したりする箇所、および、自説の問題点

や限界を指摘したり自説に不利な情報を提示したりする箇所」を全て「譲歩」として抽出し、分析を行う。

3. 分析データおよび分析方法

3.1 データの概要

伊集院 (2011)「日本・韓国・台湾の大学生による意見文データベース」の中の日本人大学生による意見文を分析データとした。本データベースに収められている意見文は、次の課題文にしたがい、辞書などは使用せずに60分以内で原稿用紙1枚に800字程度で執筆されたものである。

〈課題文〉

今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

課題文の性質上、意見文の中には「新聞・雑誌もインターネットも必要だ」という両立論を前面に押し出しているものや「情報発信の形態が紙メディアから電子メディアに変化することの長短」について論じたものなども含まれる。これらの意見文は「譲歩」の認定が困難であるため分析対象から外し、「新聞・雑誌は必要だ」(新聞擁護論²)、「新聞は不要だ」(新聞不要論)、「新聞は将来消滅する」(新聞消滅論)のいずれかの立場に立って論じている意見文を50編抽出し、分析を行った。意見文の内訳は、新聞擁護論が44編、新聞不要論が4編、新聞消滅論が2編である。分析データの概要は表1のとおりである。

表1 分析データの概要

作文数	執筆者数	総文数(平均)	総段落数(平均)
50	50	806(16.1)	215(4.3)

² ただし、「新聞擁護論」から始まり、最終的に発展的な意見として「両者を有効に利用することが大切だ」という意見を付加しているものも分析対象とした。

3.2 分析の方法

分析は工藤・伊集院(2013a)にしたがい、以下の手順で進めた。

- 1) 「譲歩」の出現箇所を抽出する際の手がかりとして、1文単位で、①執筆者の「主張」を表す文、または主張をサポートする「根拠」や「背景」を述べた文、②執筆者の主張にとって不利となる根拠や背景を述べた文、③その他(中立的な文)の3種に分類し、それぞれを「+」、「-」、「*」でコーディングした。コーディングの手がかりとなる「主張」「根拠」「背景」は、それぞれ以下のような内容を指す。

【主張】 課題文(問い)に対する答えが明確に表わされている箇所

JP018-15³ 以上のことからインターネットが普及しても新聞、雑誌は必要であると私は考えます。

JP029-01 インターネットを自由に使えるようになっても、新聞や雑誌は必要だと思います。

【根拠】 なぜその主張が成立するのか、あるいは成立しないのかを説明する箇所、ある主張の成否に関わる具体的な理由

JP022-06 インターネットによる情報はその伝達の速さ故、誤っていることも少なくはない。

JP029-12 それに対し、新聞や雑誌は、文字が読める人なら誰でも、読むことができます。

【背景】 主張に関連する歴史的背景や社会的、個人的状況を説明する箇所

JP049-01 今日のインターネットの世界的普及により、情報メディアの役割の変化が著しい。

JP009-01 私たちが小学生の頃から、授業にパソコンの操作が加えられました。

これらの文機能を手がかりに、表2の判定基準に従ってコーディングを行った。

表2 各文のコーディングの判定基準

記号	記号の定義および例
+	執筆者の主張を表す文、または主張をサポートする根拠や背景的状况を述べた文 JP057-01 私は、これからも新聞や雑誌は必要だと思う。 JP064-03 インターネット上のニュースのデメリットの1つに、その信憑性の低さがある。

³ 例文の冒頭のJPに続く5桁の数字は、ID番号(3桁の数字)－文番号(2桁の数字)である。例文は全て原文のまま示す。また、本稿で提示する例は全て「新聞擁護論」の立場の意見文から取り出したものである。

-	<p>執筆者の主張にとって不利となる根拠や背景的状况を述べた文 JP027-18 もちろん「かさばる」「紙の使用量が膨大だ」というデメリットもあるだろう。</p> <p>JP043-01 昨今インターネットが発達し、それは情報のやりとりにおいて大変な利便性をもたらしています。</p>
*	<p>執筆者の主張にとって有利・不利の評価を伴わない中立的な文、または+-の判定が困難な文 JP050-11 今日の社会では、人々の生活様式も著しく多様化している。</p> <p>JP049-08 その理由として以下のことが挙げられる。</p>
- +	<p>同一文内で、執筆者の主張にとって不利な記述から有利な記述に転じる文 JP014-09 このように手軽さやスピード感で見ればネットの方が利点は数多く見られるが、しかしだからといって新聞や雑誌が不要になるといえるのは言いすぎだと思う。</p>
+ -	<p>同一文内で、執筆者の主張にとって有利な記述から不利な記述に転じる文 JP045-16 このように多くの利点がある新聞や雑誌といった紙媒体であるが、不利点もある。</p>

- 2) 1) の判定結果を基に、コーディングの「-」と「+」が反転する個所に着目し、本研究での「譲歩」の定義に照らし合わせて「譲歩」の認定を行った。
- 3) 2) で認定された「譲歩」が出現する位置(段落)と「譲歩」及び「反論」に出現する言語形式を特定し、さらに文章構成や論理展開などに着目して「譲歩」の機能を分類した。これらの分析は、分析者2名の協議のもと行われた。
- 4) 本分析結果と伊集院 (2010)、工藤・伊集院 (2013a) の分析結果を比較し、考察を行った。

4. 分析の結果

4.1 各文の情報内容

全806文を表2の定義にしたがって分類した結果、意見文の全体の64.9%が執筆者自身の主張またはその主張をサポートする情報で占められており、主張に不利な情報を述べる文は16.5%、どちらとも言えない文が10.5%であることがわかった(表3)。また、1文内で有利(+）・不利(-)の転換が起こる場合は、そのほとんどが不利な情報から有利な情報へと転じ、その文を受けて引き続き論を展開していく「-+」のパターンであることがわかった。

学習者の書く作文の中にも、複数の情報が入れ込まれた複雑な文が見られるが、執筆者自身の主張にとって有利な情報と不利な情報が一文内に含まれる場合

は、不利な情報を文の最後に置くことは避けるよう指導するのが有効だと考えられる。また、工藤・伊集院(2013a)でも指摘したように、執筆者の主張にとって不利となる根拠や背景的状况への言及が多くなりすぎないように、全体のバランスを考えて執筆する必要がある。本分析で得られた数値の妥当性について本稿で論じることはできないが、情報の配分を考える際の一つの目安とはなるだろう。

表3 各文のコーディングの結果

記号	定義	出現数	割合
+	主張または主張をサポートする情報	523	64.9 %
-	主張にとって不利な情報	133	16.5 %
*	中立的な情報	85	10.5 %
- +	主張にとって不利な情報→有利な情報	63	7.8 %
+ -	主張にとって有利な情報→不利な情報	2	0.2 %
合計		806	100.0 %

4.2 「譲歩」の出現回数及び位置

続いて「譲歩」を抽出し、執筆者が設けた形式段落を単位にその出現位置を分析した。本稿では「譲歩」が広義に定義されているために、1編を除き全ての意見文に「譲歩」が観察された(表4)。抽出された「譲歩」は全部で126で、1編あたりの平均出現回数は2.5回である。また、過半数(53.2%)の「譲歩」が第二段落までに出現していた(表5)。第一段落を「はじめ」、最終段落を「おわり」、それ以外を「なか」と大きく3分類して出現位置をみると、「なか」が過半数(53.2%)を占め、「おわり」での「譲歩」は11.9%にとどまった。「おわり」に該当する箇所での「譲歩」の出現が少なくなるという結果は、伊集院(2010)、工藤・伊集院(2013a)の結果とも同様である。抽出された「譲歩」が全て効果的に機能しているかについては、4.4で論じる。

表4 意見文1編あたりの「譲歩」の出現数

0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回
1編	10編	17編	12編	5編	4編	1編

表5 「譲歩」の出現位置

段落		出現数		出現率	
第一段落	はじめ	36	36	28.6 %	28.6 %
第二段落	なか	31	67	24.6 %	53.2 %
第三段落		24		19.0 %	
第四段落		8		6.3 %	
第五段落		4		3.2 %	
最終段落	おわり	15	15	11.9 %	11.9 %
不明		8	8	6.3 %	6.3 %
合計		126	126	100.0 %	100.0 %

※段落を設けずに執筆された意見文に関しては「不明」に分類した。

4.3 「譲歩」及び「反論」の言語形式

続いて、「譲歩」とそれに対する「反論」と認定された文または節に、繰り返し出現する有標の言語形式のコーディングを行った。「譲歩」は文機能に「-」（主張にとって不利な情報）を含むもの全てを分析対象としたが、「反論」は「譲歩」に対する「反論」の最初の一文または節のみを分析対象とした。このように限定したのは、複数の文にわたって「反論」が続いている場合でも、どこまでが「譲歩」への「反論」に該当するのか、厳密な認定が困難であったためである。また、「譲歩」が入れ子型の構造になっていて、複数の「譲歩」が一つの「反論」にかかっている場合は、同一の「反論」について繰り返しカウントすることはせず、1度のみカウントした。「譲歩」、「反論」それぞれに対し、文中（文末以外）または文末に3回以上出現する有標形式を抽出し、結果をまとめた。

表6 「譲歩」と「反論」の言語形式（3回以上出現したもの）

		文中（文末以外）		文末	
譲 歩	確かに	30	～だろう	18	
	～ば／たら／なら	20	言える／考えられる他（自発・可能）	12	
	もちろん／むろん	10	～のだ／わけだ	5	
	もはや／今や	7	～とされている他（伝聞）	4	
	～点では／においては	6	～なくもない／否めない（二重否定）	3	
	～場合	3	～かもしれない	3	
	～と	3			
	実際／現に	3			

反論	しかし(ながら)	54	思う／考える	18
	～が／けれど(も)	51	～だろう	15
	それでも	7	言える／考えられる他(自発・可能)	11
	～(だ)からといって	5	～のだ	7
			～(の)だろうか(反語)	5

結果として、伊集院(2010)の分析結果と同様、「確かに～。しかし、～。」と「確かに～が、～。」が典型的な「譲歩」と「反論」の言語形式であることが確認された。その他に特筆すべきものとしては、「～ば」を主とする仮定条件の用法が挙げられる。同様の機能を果たし得る「～点では／においては」「～場合」「～と」も合わせると32例となる。これらの言語形式の使用は「ある仮定・条件・制約を付けた上で自説に不利な情報を示す」という書き手の姿勢の表れであると解釈できる。

また、「譲歩」と共起しやすい文末の有標形式には、「～だろう」と「言える／思える／考えられる／思われる(自発・可能)」、「～のだ／わけだ」などがある。これらは「反論」でも高頻度で用いられているが、「譲歩」では主に自発・可能形で出現する思考動詞が、「反論」では辞書形で出現しやすいという相違がある⁴。その他に、「譲歩」においては「～なくもない／否めない」という二重否定形式が、「反論」においては「～(の)だろうか」という反語形式が見られる。このような形式は、使用場面や用法が理解しにくく、学習者にとっては産出しにくいものである。

以下に「譲歩」の言語形式の具体例を示す。下線は、本データで複数回観察された「譲歩」の言語形式の例である。

- JP008-03 情報を集めることに関して言えば、インターネットは一番多く利用されていると思われます。
- JP021-08 こう言うと、インターネットでもあらゆる、むしろ新聞より多くの情報を入手できるではないか、と言われるかもしれない。
- JP030-02 確かに、インターネットの情報は情報伝達の速さ、動画等の映像の豊富さ、手軽さの点では新聞や雑誌より優れており、一見、新聞や雑誌は不要になったかのように思える。
- JP032-11 ただ、これからますます技術が進み、以上のような問題を解決して行けば、インターネットの需要が増え、新聞や雑誌の需要は減って行くでしょう。

⁴ 「反論」で18例見られた「思う／考える」は、「譲歩」ではそれぞれ1例ずつしか出現していなかった。

JP059-11 勿論、私もそう思いたくなる気持ちが分からなくもない。

JP060-02 この手の議論においては往々にしてこのようなアナログのモビリティの欠如が指摘されることが少なくない。

4.4 「譲歩」の機能

続いて、「譲歩」と認定された文が意見文においてどのような働きをしているか、談話の論理展開を読み取りながら分析を行った。その結果、本分析データに見られる「譲歩」は、【1. 相反する主張の提示】【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】【3. 自身の主張と相反する状況の提示】【4. 自身の根拠の弱点の指摘】【5. 自説への注釈】の5つのカテゴリと、いずれのカテゴリにも属さない【6. その他】に分類された。カテゴリ1から3は、さらに2つの下位カテゴリに分類される。各機能の分類と出現数は表7のとおりである。

各カテゴリの出現数を比較すると、【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】【3. 自身の主張と相反する状況の提示】【4. 自身の根拠の弱点の指摘】【1. 相反する主張の提示】【5. 自説への注釈】の順になっている。以下に、カテゴリ別に「譲歩」の機能を分析する。

表7 「譲歩」の機能の分類および出現数

カテゴリ		論理展開による下位カテゴリ	出現数	
1	相反する主張の提示	1-1 相反する主張の提示→反論または主張	10	12
		1-2 相反する主張の提示→問題提起	2	
2	相反する主張に有利な根拠材料の提示	2-1 相反する主張に有利な根拠材料の提示→反論または主張	36	50
		2-2 相反する主張に有利な根拠材料の提示→対照的な根拠材料の提示	14	
3	自身の主張と相反する状況の提示	3-1 自身の主張と相反する状況の提示→反論または主張	21	25
		3-2 自身の主張と相反する状況の提示→問題提起(→主張)	4	
4	自身の根拠の弱点の指摘	4-1 自身の根拠の弱点の指摘→反論	23	23
5	自説への注釈	5-1 自説への注釈→根拠または主張	10	10
6	その他	6-1 その他	6	6
合計			126	

【1. 相反する主張の提示】

このカテゴリーの「譲歩」には、自身の主張と相反する主張を提示、紹介した上で、「反論または自身の主張を提示するもの (1-1)」と「問題提起するもの (1-2)」がある。同一文内に「根拠」や「背景の情報」が含まれている場合でも、「相反する主張の提示」が含まれている場合は、ここに分類した。本分析データは、あるテーマに対して肯定あるいは否定の立場に立って論じるものではない。そのため、立場を明確にして論じるよう指示した工藤・伊集院 (2013a) の結果より出現数が少なく、また、「確かに携帯電話には問題もあるが、基本的には有益なものだと思う。」(p.6) のように、明確に対立する主張を承認している例も見られなかった。本分析データでは、「～とも考えられる」「～かもしれない」などの言語表現を伴い、あくまでも「弱い承認」、または単なる「提示」「紹介」であることが強調されている (例 1、2)。例 2 のように「問題提起」の形式で読み手に反語解釈を促すのも特徴的である。

- 例 1 JP001-02 確かに、インターネットが普及した今日、新聞や雑誌は情報の伝達が遅く、生産コストもかかることから、もはや不要なものであるとも考えられる。
(-) [相反する主張に有利な根拠の提示 + 相反する主張の提示]
JP001-03 しかし、私は以下の 4 つの理由から、新聞や雑誌は今日においてもなお必要であると考え。(+) [自身の主張提示]
- 例 2 JP032-01 確かに、世界中でインターネットが自由に使えるようになり、誰でもそこで最新のニュースを見ることができるなら、新聞や雑誌はいらなくなるように思うかもしれません。(-) [ある仮定の下に成立する対立的な主張の提示]
JP032-02 しかしながら、今、本当に誰でも自由にインターネットが利用できていると言えるのでしょうか。(* or + ⁵) [問題提起 = 反語解釈による自身の主張提示]

【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】

このカテゴリーは、自身の主張とは相反する主張にとって有利な根拠を示す「譲歩」で、学習者の意見文にも母語話者の意見文にも最も多く出現するカテゴリーである。論理展開に応じて細かく分類すると、「譲歩」のあとで「直接的に反論ま

⁵ 「* or +」は、単なる疑問文として捉えれば中立的な情報 (*) であるが、反語解釈が可能であれば執筆者の主張 (+) と解釈できることを意味する。文のコーディング結果 (表 3) を集計する際は、「+」に含めた。

たは自身の主張を提示するもの(2-1)」（例3、4）と「自身の主張にとって有利な根拠を対照的に示すもの(2-2)」（例5）が見られるが、いずれも意見文には欠かせない典型的な「譲歩」の論理展開だと考えられる。

例3 JP038-12 もちろん、インターネット独自の利点もあろう。

(-) [相反する主張に有利な根拠の存在の提示]

JP038-13 複数のメディアの比較閲覧などはインターネットの得意分野だろうし、ニュースに関連した情報を検索サイトを通じて素早く集めるなどということはインターネットにしかできない芸当である。

(-) [相反する主張に有利な根拠材料の提示]

JP038-14 しかしそのいずれも、紙媒体の原始性ゆえに有する簡便性を押してまで、新聞、雑誌を駆逐してしまうほどには強力でない。(+) [反論]

例4 JP046-02 確かに、インターネットを使えば、世界中のニュースを知ることが出来るし、新聞で得られる情報以上の情報を得られるかもしれない。

(-) [相反する主張に有利な根拠材料の提示]

JP046-03 しかし、まずその情報量の多さが1つ問題である。(+) [反論]

JP046-04 インターネットの情報は必ずしもすべてが正しいとは限らないし、そのばく大な情報からどれが重要なかを判断しづらい。(+) [反論の詳述]

例5 JP019-08 第二に、インターネット経由の情報は速度は優れているが内容は必ずしも優れてはいない。

(-+) [自身の主張と相反する主張にとって有利な根拠の提示→対照させる形で自身の主張にとって有利な根拠の提示]

【3. 自身の主張と相反する状況の提示】

このカテゴリーは、自身の主張とは相反する状況（歴史的背景や社会的・個人的状況）を提示し、「反論または自身の主張を提示するもの(3-1)」（例6）または「問題提起をするもの(3-2)」（例7）である。このカテゴリーも、【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】に続いて高頻度で見られる「譲歩」であり、意見文の論理展開に組み込みやすい「譲歩」と言える。ここでも「問題提起」の形式で読み手に反語解釈を促す反論の形式が見られる（例7）。また、意見文の「はじめ」に置かれることが多く、他のカテゴリーの「譲歩」と比較して長い「譲歩」となりがちで、有標の言語形式を伴わずに描写されやすいという特徴が見られる。

- 例6 JP068-01 インターネットをはじめとする情報技術はここ数年間で大きく進歩した。
 (-) [自身の主張と相反する状況の提示]
- JP068-02 リアルタイムで世界各国から情報が届けられ、逆に自分から海外に向けて情報発信することも容易になった。
 (-) [自身の主張と相反する状況の詳述]
- JP068-03 さらに、新聞や雑誌をはじめとする紙を使用する媒体と違って、半永久的に内容を保存することが可能になった。
 (-) [自身の主張と相反する状況の詳述]
- JP068-04 しかしながら、メディアはインターネットで十分だという意見には賛成できない。(+) [反論]
- 例7 JP044-01 現在インターネットの普及により、最新の情報を自由にいつでも私たちは見ることができる。
 (-) [自身の主張と相反する状況の提示]
- JP044-02 そのニュースも政治からスポーツ、芸能まであらゆる範囲を選択できるのだ。
 (-) [自身の主張と相反する状況の詳述]
- JP044-03 ではこの新しいメディアの登場によって、活字媒体のメディアである新聞や雑誌は不要になってしまうのだろうか。
 (* or +) [問題提起=反語解釈による自身の主張提示]

【4. 自身の根拠の例外の指摘】

これは、自身が持ち出した根拠の例外や限界、弱点を指摘した上で反論を加え、根拠の穴を補強して盤石化を図ろうとする「譲歩」である。このような「譲歩」は工藤・伊集院(2013a)の超上級日本語学習者のデータでは4例のみであり、これまで見た【1】【2】【3】のいずれの「譲歩」よりも高度な論法が必要とされると考えられる。自ら持ち出した自身の主張に有利な根拠に対し、想定される弱点を読み手より先回りするような形で取り上げ、ディフェンスを重ねていく論証法(例8～10)は、母語話者データでは、【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】、【3. 自身の主張と相反する状況の提示】に続いて多く出現しているが、学習者にとっては難易度の高い「譲歩」であると言えるだろう。

- 例8 JP019-09 新聞や雑誌は企業が頒布するものである以上その内容に責任を持つ主体が明確に存在する。(+) [自身の主張に有利な根拠の提示]

- JP019-10 一方インターネットは、もちろん責任ある企業によるサイトも多いが、大多数は無名の個人の運営するサイトであろう。
(- +) [自身の根拠の例外の指摘→反論]
- JP019-11 これらのサイトにある情報が誤謬だとしても、その責任が自分にあると自覚して情報を発信する者は多いのかどうか。
(* or +) [反語解釈による反論]
- JP019-12 おそらくは新聞や雑誌においてよりも気軽に記事を執筆し、従って誤謬の生じる割合も高まると思われる。(+) [反論]
- 例9 JP032-05 また、パソコンは建物や家の中など、設備の整った場所でなければ使えません。(+) [自身の主張に有利な根拠の提示]
- JP032-06 町中で、どこでもすぐ近くに公共の建物があり、そこにインターネットに接続できるような環境の人には問題ないかも知れませんが、そうでない人にはインターネットを利用できる時間も限定されます。
(- +) [自身の根拠の例外の指摘→反論]
- 例10 JP059-18 新聞・雑誌には、知識と経験を積んだ編集者がいる。
(+) [自身の主張に有利な根拠の提示]
- JP059-19 彼らが、現代の世相を理解するために必要だと思われるような情報を予め取捨選択して私達に提供してくれる。(+) [自身の主張に有利な根拠の詳述]
- JP059-20 無論、そこに彼らの思想が反映されていること、棄却された情報が存在することを知っておかなければならないが、素人である私達がパソコンの画面上で勝手に取捨選択をするよりは遥かにリスクの少ないことであろう。
(- +) [自身の根拠の弱点の指摘→反論]

【5. 自説への注釈】及び【6. その他】

これらのカテゴリーは、「譲歩」として位置付けることが妥当か否か判断が難しいものも含まれるが、本研究の「譲歩」の定義に照らし合わせると、排除できないものである。【5. 自説への注釈】は、自身の見解(主張または根拠)を述べる前の注釈的なコメントであり、例11～13の他にも「JP064-12これはネットと付き合ってまだ日が浅い私の偏見かもしれないが」「JP063-08私自身がインターネットのニュースを利用しないためははっきりしたことは言えないが」「JP044-14これは個人的な事柄であるかもしれないが」「JP023-13これは私だけかも知れないが」などが見られた。いずれも、これから述べる自身の見解についての見解を述べる、ある種メタ的な言及と言える。

例 11 JP019-15 古く月並みな論ばかりと言われかねないけれども、以上のような理由から、私は新聞や雑誌の必要性を確信するものである。(－＋)

例 12 JP024-04 あたり前といえばそうだが、ネットの場合これらの記事がウェブ上に散在しているのである。(－＋)

例 13 JP047-09 論点がずれますが、雑誌、新聞は資源を無駄にします。(－＋)

【6. その他】は、いずれの категорияにも分類できなかったもので、自身の主張を述べる前の「異なる考えをもつ他者への感情的な配慮」(例 14)や「感情的配慮とも妥協案とも解釈できるもの」(例 15)が含まれる。

例 14 JP062-15 確かに、新聞や雑誌が少なくなってしまうのもさみしいような気がしますが、それらをバサバサと持ち歩く人は減り、逆にインターネットを利用する人は増えるでしょう。(－＋)

例 15 JP017-11 インターネットが使いたい人はインターネットを使えばいいでしょう。(－)

JP017-12 ですが、それによって既存のメディアが無くなることはありません。(＋)

これらは工藤・伊集院 (2013a) の学習者データには見られなかったもので、自身の主張や根拠を強く掲げることに対する躊躇や遠慮、配慮から生じる言及とも捉えられる。このような「譲歩」が、決められた字数で読み手を納得させる目的で執筆する意見文において、効果的に機能するかどうかは疑問である。

5. 考察

以上の分析結果を、「譲歩」の位置と機能の關係に着目してまとめたものが表 8 である。

表 8 「譲歩」の位置と機能による出現数

段落／機能	1		2		3		4	5	6	合計
	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	4-1	5-1	6-1	
はじめ	6	2	6	2	16	4	0	0	0	36
なか	3	0	26	10	3	0	19	5	1	67
おわり	0	0	3	0	2	0	2	3	5	15
不明	1	0	1	2	0	0	2	2	0	8
合計	10	2	36	14	21	4	23	10	6	126
	12		50		25		23	10	6	

母語話者による「譲歩」は、意見文の「なか」で【2. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】をするもの、次いで「はじめ」で【3. 自身の主張と相反する状況の提示】をするものが多く、工藤・伊集院 (2013a) の結果と同様の傾向を示した。一方、学習者に少なく、母語話者に高頻度で見られた「譲歩」は、「なか」で主張の成否に関わる論証をする際に【4. 自身の根拠の弱点の指摘】を行い、自らディフェンスしながら根拠を盤石にしていく用法である。有効な論証の一つであるが、周到に論理を組み立てる思考力と高度な日本語力が要求される「譲歩」であると言えるだろう。また、自身の「見解についての見解」を述べる【5. 自説への注釈】の用法も、母語話者に特徴的であった。【1. 相反する主張の提示】は、意見文の「はじめ」に置かれることが多いが、工藤・伊集院 (2013a) のように特定の立場に立って論じるタイプの意見文で用いられやすい「譲歩」であり、本分析データのように自由に論じるタイプの意見文では出現数が限られていた。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語母語話者の意見文における「譲歩」の出現位置、言語形式、論理展開上の機能を分析し、工藤・伊集院 (2013a) で残されていた課題の追究を試みた。これにより、超上級レベルの日本語学習者の分析だけでは見出せなかった、「譲歩」の実態を網羅的に記述することが可能となった。しかし、本稿では、その説得力や有効性について論じることはできなかった。特に、【5. 自説への注釈】のような「譲歩」が読み手にどのように評価されるのか、興味深い課題である。日本語学習者への指導において有効な「譲歩」を解明するためには、引き続き、評価的な観点からの分析も進めることが必要であろう。

引用文献

- 伊集院郁子(2010)「意見文における譲歩構造の機能と位置—『確かに』を手がかりに—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第2号 pp.101-110
- 伊集院郁子・横田淳子(2010)「『JLC日本語スタンダード』に基づいた中級段階における文章表現指導の試み—『意見文』の指導を中心に—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第36号 pp.85-100
- 工藤嘉名子・伊集院郁子(2013a)「超級学習者の意見文における『譲歩』の論理性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第39号 pp.1-15
- 工藤嘉名子・伊集院郁子(2013b)「意見文における効果的な『譲歩』とそうでない『譲歩』」『日本語教育方法研究会誌』Vol.20 No.2 pp.74-75
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(2013)「全学日本語 Can-do リスト：文章表現(試行版)」(内部資料)
- 富田英司(2009)「大学生の視点から見た『説得力のあるアーギュメント』とは」『日本認知科学会第26回大会論文集』pp.334-335
- 山口洋介・三宮真智子(2013)「一面的な情報提示からの脱却による意見文の改善」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第39号 pp.73-87
- 吉島茂・大橋理枝(訳・編)(2004)『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社
- Stanovich, K. E., West, R. F., and Toplak, M. E. (2013). Myside bias, rational thinking, and intelligence. *Current Directions in Psychological Science*, 22 (4), pp.259-264.
- Toplak, M. E., and Stanovich, K. E. (2003). Associations betweenmyside bias on an informal reasoning task and amount of post-secondary education. *Applied Cognitive Psychology*, 17, pp.851-860.
- Wolfe, C. R., and Britt, M. A. (2008). The locus of themyside bias in written argumentation. *Thinking and Reasoning* 14, (1), pp.1-27.

引用データベース

- 伊集院郁子(2011)「日本・韓国・台湾の大学生による意見文データベース」
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html

The Logicality of “Concession” in the Opinion Essays of Japanese College Students

IJUIN Ikuko, KUDO Kanako

This research aims to investigate the logicality of “concession” appeared in 50 opinion essays written by Japanese college students through the analyses on its language patterns and functions. In this research, “concession” is broadly interpreted to mean “the parts in which a writer provides information advantageous to or shows understanding towards the opposing opinion, or provides information disadvantageous to or points out the problems and limits of his/her own opinion” (Kudo & Ijuin 2013a; 2013b).

First, the analysis on the language patterns of Japanese college students’ opinion essays shows that expressions such as “*tashikani*”, “*-ba/-tara/-nara*”, and “*mochiron/muron*” are frequently used in “concession”, co-occurring with the sentence-ending expressions such as “*-daroo*” and “*-(ra)reru*”.

Secondly, from the analysis on the functions of “concessions”, the following 5 major categories of “concession” were identified: (1) Presentation of the opposing point of view; (2) Presentation of basis of argument beneficial to the opposing point of view; (3) Presentation of information such as historical background and social situation that conflicts with the writer’s opinion; (4) Indication of the weak points of the writer’s own argument; (5) Annotative comment on the writer’s own argument. It was also found that these 5 categories of “concession” have their own patterns of logical development of argument.

The results of this research may be beneficial in teaching an effective way of “conceding” in an opinion essay.

